

北大構内の遺跡

7

昭和62・63年度



1989

壹之分萬三形真

札幌農學校及農場略圖

本校敷地 一萬三千六百二十四坪
 第一農場 二十七萬九千三百三十六坪
 第二農場 四十九萬四千二百五十一坪

第一農場之一部



牛馬舍所及牧場
 口傳習場及可猪舍
 器械室
 二種芝田舎
 木耕畜舎
 肥料置所
 下農産製造所
 羊舎
 豚舎
 又飼料所
 又飲工所
 養蠶室
 官舎

北大構内の遺跡

HOKKAIDO UNIVERSITY CAMPUS SITES

7

昭和62・63年度

北海道大学

序

北海道大学の基礎となったのは、開拓使による農学校であった。その伝統の上に築かれたキャンパスが、埋蔵文化財の調査が進むにつれ、奇しくも古代の原始的な農村の上に広がっていた事実が少しずつ明らかになってきたということである。

これまで北海道の古代といえば、誰しもがシカとクマを追う狩り人の世界を想像していた。その常識が、本学構内の調査結果から徐々にではあるが変わりつつある様におもう。

私は考古学には全くの素人であるが、今回の報告にも見られるとおり、発掘調査で得られた古代の種子や草本部分が、走査電子顕微鏡を使用した観察で科学的にかなり明確に同定できるようになってきたところは驚異的である。こうした研究の進展で、古代人の農耕生活の実態が次々と明らかにされ始めているのは、まことに興味ぶかい。今後、埋蔵文化財調査室のメンバーを中心としてさらに詳しい検討が進めば、北海道の歴史に新しい1頁を加える可能性があると期待している。

構内の各地点の地下には、いろいろな古代の遺跡がまだ眠っている。また、埋蔵文化財ではないが、国指定の重要文化財建造物としてのバーンも残されている。大学としては、今後次々に行われるであろうキャンパスの再編成や近代化の中で、こうした文化財を如何に活用し後世に伝えていくかが責務となろう。この分野でも、全学の知恵を結集してあたっていきたいと考えている。この報告が、その一助になれば幸いとおもう。

1989年3月15日

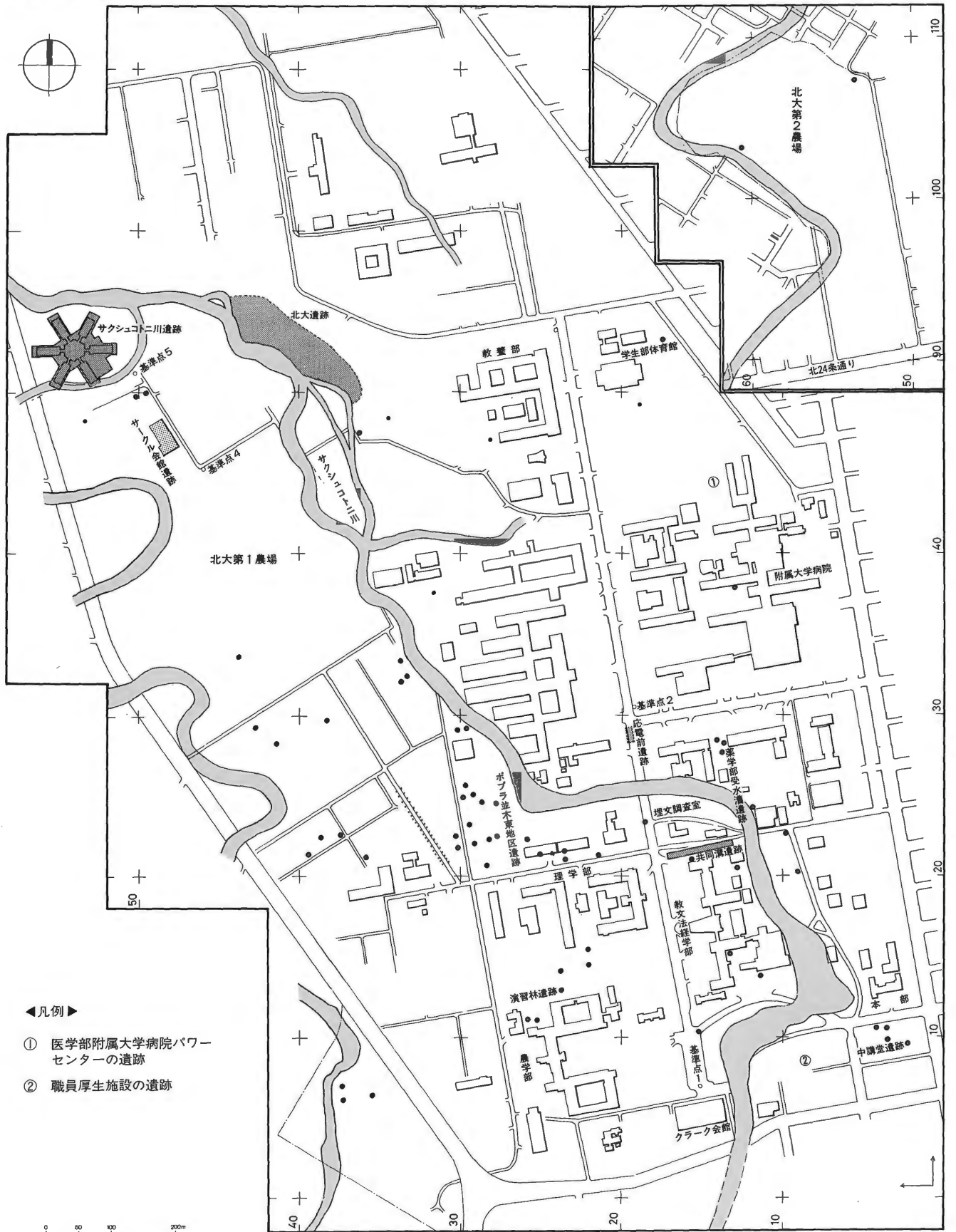
北海道大学長

伴 義 雄

目次

序	3	《図・表目次》	
第Ⅰ章 昭和62年度の事業報告	7	第1図 北大構内図	6
I-1 調査および保存事業の報告	7	第2図 昭和62年予備調査の写真	9
I-2 医学部附属大学病院パワーセンター 建設予定地の調査	10	第3図 医学部附属大学病院パワーセンター 建設予定地の調査	11
I-3 職員厚生施設建設予定地の調査	12	第4図 職員厚生施設建設予定地の調査	13
第Ⅱ章 昭和63年度の事業報告	15	第5図 昭和63年度予備調査の写真	17
II-1 調査および保存事業報告	15	第6図 北大構内出土土器の変遷	20
II-2 本調査	16	第7図 現生オオムギと出土資料の比較	23
付篇-1 北大構内遺跡の土器群変遷と 推定される年代観	19	第8図 現生オオムギと出土資料の比較	24
付篇-2 サクシュコト川遺跡出土植物遺存体の 再検討資料	21	第9図 出土イネ科植物片およびムギの小穂略図	25
あとがき	27	第10図 サクシュコトニ川遺跡、遺構配置図	26
		第1表 サクシュコトニ川遺跡における オオムギ・コムギの穎果および 穂軸(オオムギ・コムギ)の出土表	22

第1図 北大構内図



◀凡例▶

- ① 医学部附属大学病院パワーセンターの遺跡
- ② 職員厚生施設の遺跡

第I章 昭和62年度の事業報告

I-1 調査および保存事業の報告

(1) 昭和62年度に本調査を行った地区は、以下に記す2箇所であり、詳細はI-2・3に示す通りである。

- 1 医学部附属大学病院パワーセンター建設予定地
- 2 職員厚生施設建設予定地

(2) 昭和62年度に予備調査を行った地区は、以下に記す5地点10箇所である。

3 獣医学部実験研究棟建設予定地〈第2回〉

▶調査期間／6月9日・11日・13日

▶面積／875 m²

当地域は、1981年の調査区(吉崎・岡田編1988: pp. 10~11)の隣接地である。そこで、今回の予備調査では前回の所見にもとづき、重機によって積み土を排除し遺物包含層などがどのように堆積しているかを調査した。調査は東西に50 mのトレンチを2本、南北に15~10 mのトレンチを5本、合計7本を設定し行った。結果は前回とほとんど変わることがなく、遺物、遺構はまったく発見されなかった。というより、当地区は全面が低湿地(沼地)でヒトの居住には劣悪な条件の場所であったし、また、そこでの生産活動を示すような遺構も検出されなかった、というわけである。調査最終日の13日午前中に写真撮影、地層・エレベーション図などを作成し、午後から湿地用ブルドーザーで埋め戻しを行いすべての調査を終了した。

4 農学部農業技術開発センター建設予定地《第2回》

▶調査期間／7月6日~7月10日(第1次)、7月20日~31日(第2次)

▶面積／1,740 m²

第1次：当地区の現状は、牧草地が大部分で残り部分はパドックに使用されている。また、農学部がいまのように土地利用する以前のこの一帯は湿地で、相当の量の客土をして現在の状態にした、ということである。そこで予備調査にあって、重機を利用してこの客土を除去し、旧地表面あるい

は遺物包含層もしくはその相当層を確認することにした。調査は、西側の建物予定部分(1,440 m²)-A地区とよぶ一に巾1 mの試掘溝8本と東側の建物予定地部分(300 m²)-B地区とよぶ一に巾1 mの試掘溝を2本設け実施した。そのうちの1本は、A・B地区を結ぶ東西90 mの大試掘溝である。なお、A・B地区の北側の部分は、実験農場として使用中のため、今回は調査の対象から除外した。

調査の結果、A地区は、浅い部分で40 cm、深い部分で100~150 cmの客土あるいは積み土がみられた。その下層には、粘土質の黒色土や青粘土がみられ、この地域全体が湿地帯であったことをうかがうことができる。とくに、東側でB地区に寄った部分には、ほぼ南北に走る旧河川とみられる深い落ち込みがみられ、粘土質の黒色土や青粘土が厚く堆積している。この部分をはじめ、A地区からは遺構や遺物はまったく検出されず、このような湿地がヒトの居住には不適當であったことを示している。さらに、ここでの生産活動を物語るような遺構も検出されなかった。

一方、B地区は厚さ20 cmの客土を除去すると赤褐色の砂質粘土層が顔を出す。A地区とは違ってきわめて乾燥した地盤であったことがわかる。つまり、この地区はA地区などの湿地帯に接した自然堤防状の高まりであったことを示している。2本の試掘溝には遺構、遺物はみつかっていないが、作業員による精査が必要と判断した。

第2次：A地区は黒色土層の下面のエレベーション、土層堆積状況図の作成や写真撮影を行って調査を完了した。B地区は、8名の作業員によって赤褐色の砂質粘土層上面の精査を実施し、遺構、遺物の検出に努めた。その結果、遺構、遺物はまったく検出されず、したがって、当地区は遺跡ではないと判断し調査を終了した。

5 共同溝予定地

1987年9月末日の段階で、大学本部より示された構内共同溝予定地は以下の6箇所である。

- 1 クラーク会館西側から農学部南側にかけての道

路ぞい(全長約 100 m)

- 2 理学部触媒研究所西側の道路ぞい(全長約 200 m)
- 3 第 1 農場事務所前(全長約 10 m)
- 4 理学部北側の道路ぞい(全長約 300 m)〈第 2 図〉
- 5 情報教育センター北東の道路ぞい(全長約 30 m)
- 6 医学部附属動物実験施設東側および南側(全長約 80 m)

▶調査期間/10月15日～10月24日

どの地点とも積み土がみられたので、まず重機にとってそれを除去した後、精査の必要があると判断した地点についてのみ作業員によってそれをおこなった。

- (1) 重機(バック・ホー)による積み土の除去作業
この作業は 1987 年 10 月 15 日に、5 (この地点は地表面から作業員による)を除く地点で実施した。
- (2) 作業員による精査作業
この作業は 1987 年 10 月 15 日に開始し、10 月 22 日に終了した。この作業を実施したのは、3 (15 日)、4 (15 日～17 日)、5 (21～22 日)、6 (21 日)の 4 地点である。
- (3) 重機(バック・ホー)による埋め戻しの作業
この作業は 1987 年 10 月 21 日に実施した。
- (4) 作業員による埋め戻しの作業
この作業は 5 についてのみ、1987 年 10 月 24 日に実施した。

■調査の結果

- (1) 遺物が出土したのは 4 で、旧バレーボールコート
の西端の部分からである。この部分は小沢に黒色土が堆積しており、そこから続縄文期・後北 C₂ 式
(西暦 4 世紀頃)土器の小破片 2 点が出土した。
 - (2) そのほかの地点からは遺物、遺構は発見され
なかった。
- 6 文学部実験動物舎建設予定地 〈第 2 図〉

▶調査期間/10月16日

▶面積/278.850 m²

(1) 調査の方法

この地区は積み土がみられたので、重機によってそれを除去した後、必要に応じて作業員による精査を計画した。重機による作業に先だて、現実験動物舎の東側にそって 1 本(第 1 トレンチ)、工事予定地内の北端(第 2 トレンチ)、中央(第 3 トレンチ)、南端(第 4 トレンチ)には東西に計 3 本の試掘溝を設定した。

(2) 所見

4 本の試掘の結果、積み土が 2.6～3.2 m で川砂に達した。したがって、この地区は旧河川(標高 11.783 m)に土盛りをしていたことが判明した。なお、この地区の埋め戻しは重機を使用し、10 月 21 日に完了した。

7 農学部附属植物園内電気ケーブル埋設予定地 〈第 2 図〉

▶調査期間/10月23日

▶面積/10 m²

作業員による手掘り。20～25 cm の厚さで客土、その下に黄色粘土が堆積していた。しかし、古代の遺跡・遺物は発見されなかった。

(3) 昭和 62 年度に工事中立会を行った地区は、以下に記す 3 箇所である。

- ① 工学部北口玄関廻り舗装補修現場
—————8月27日～28日
- ② 農学部附属植物園内電気ケーブル埋設現場
—————10月23日～24日
- ③ 工学部熱エネルギー変換工学実験室建設現場
—————昭和 63 年 3 月 3 日

以上の工事現場は、舗装材や置土あるいは旧建物の基礎工事などですでに破壊が著しい。また、地層の保存状態が比較的良好でも古代の遺構、遺物などは発見されなかった。

第2図 昭和62年度の予備調査の写真



獣医学部実験研究棟建設予定地

農学部農業技術開発センター
建設予定地



文学部実験動物舎建物予定地



共同溝、理学部北側



農学部附属植物園

I-2 医学部附属大学病院パワーセンター建設予定地の調査

- ▶ 遺跡名——K 39
- ▶ 所在地——北海道札幌市北区北 16 条西 6 丁目
(北海道大学札幌団地)
北緯 43 度 04 分 東経 141 度 20 分
- ▶ 調査主体——北海道大学
- ▶ 調査機関——北海道大学埋蔵文化財調査室
- ▶ 調査期間——1987 年(昭和 62 年) 6 月 1 日～1987
年(昭和 62 年) 6 月 30 日
- ▶ 調査面積——1,512 m²

《調査の経過及び所見》

I 予備調査

1987 年(昭和 62 年) 6 月 1 日から同 6 日までの 6 日間は、重機を使用して積み土の除去作業を実施した。この作業の結果、当地区北側からほぼ中央部分にかけて旧共同溝などによって破壊が著しく、旧地表面や遺物包含層あるいはそれに相当すると思われる土層をほとんど確認することができなかった。一方、ほぼ中央から南側にかけての部分は、遺物包含層あるいはそれに相当すると思われる土層が残存しているのが確認できたので、この部分については作業員による精査を実施することにした。ただし、この部分も西側に旧共同溝、東南側に旧医学部精神科建造物の基礎などがみられたため、精査の対象から除外した。したがって、作業員による精査の対象面積は、300 m²である。

1987 年(昭和 62 年) 6 月 15 日から同 20 日までの 6 日間は、作業員 7 名によって精査を実施し、当地区が遺跡であるのか否かを検討した。

精査は、調査対象地区に巾 1 m、長さ 9～10 m の試掘溝を東西に 3 本、南北に 5 本、合計 8 本設定し実施した。〈第 3 図〉

■試掘溝の所見

試掘溝 1 / 6 月 18 日・19 日発掘・ローム漸移層(第 IV 層という)から続縄文期・後北 C₂・D 式土器の破片 3 点が出土した。遺構は検出されなかった。

試掘溝 2 : 試掘溝 8 / 6 月 18 日～20 日発掘。遺

物・遺構とも検出されなかった。

以上のように、試掘溝 1 の所見にもとづけば当地域は、続縄文期のうち後北 C₂・D 式土器が製作・使用された頃(西暦 3～4 世紀)に営まれた遺跡であり、生活面はローム漸移層(第 IV 層)の下面(標高 14.1 m)であることが判明した。そこで、この時点をもって関係機関に「遺跡発掘届」を提出、この地域内での遺物のひろがりや遺構の有無あるいは性格などを明らかにするための本調査が計画、実施された。

2 本調査

本調査は、1987 年 6 月 22 日～同 6 月 30 日までの 8 日間、7 名の作業員によって実施した。本調査では、予備調査の所見にもとづき遺物が出土した試掘溝 1 の周辺を拡張・発掘し遺物、遺構の検出に努めた。

調査の結果、試掘溝 1 の西側で、巾約 1 m の発掘区(このさらに西側は旧共同溝などが埋設されて調査不能)で、ローム漸移層(第 IV 層)から続縄文期の土器片 2 点と礫破片 1 点が出土した。また、試掘溝 1 と同 2 との間の発掘区からは生活面のかなり上位(第 III 層の黒色土層)で同じく続縄文期の土器片 2 点が出土した。

この調査区内では、遺溝は全く検出されなかった。

3 まとめ

① 今回の予備調査、本調査の結果、当地区から出土した遺物はつぎのとおりである。

続縄文期の土器片——8 点〈第 3 図〉

礫の破片——1 点

② これらの遺物は、試掘溝 1 やその周辺の発掘区つまり、当地区の南西部にのみ散発的に分布し、遺構は検出されなかった。

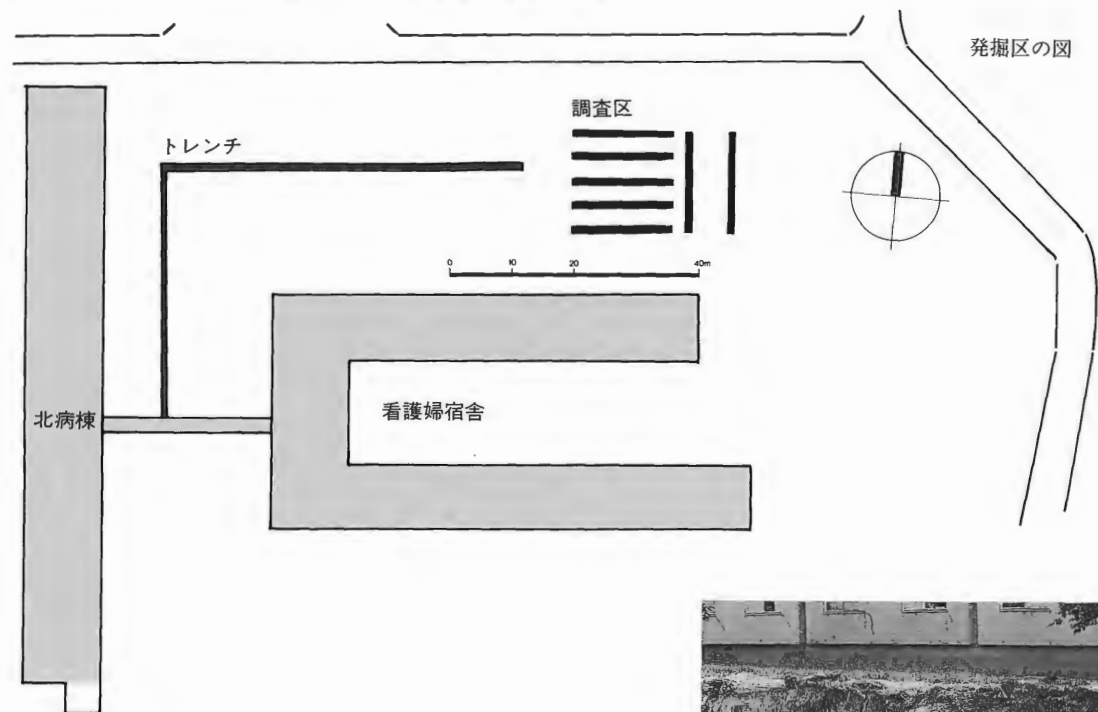
③ 住居や墓地などの遺構は検出されなかった。

④ 遺物の出土あるいはその状況からみて、当地区は続縄文期のうち後北 C₂・D 式土器が製作・使用された頃(西暦 3～4 世紀)に営まれた遺跡であることが判明したが、その性格など詳細は不明である。遺物の分布状況や遺物包含層の堆積状況など

から判断すると、遺跡の主体部は今回の調査区の南西側に広がっていると思われる。したがって、その地域での状況の把握が今回の調査区での遺物

の性格などを解明する鍵を握っていると同時に、今後その地域に開発計画がなされる際に十分な配慮・検討が必要となろう。

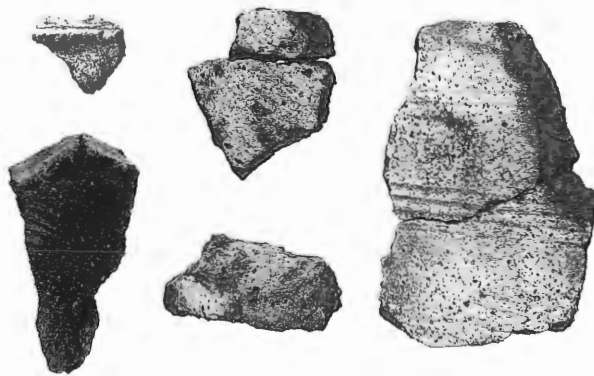
第3図 医学部附属大学病院パワーセンター建設予定地の調査



発掘区を南西側からみる



発掘状況を西側からみる



出土した後北C2・D式土器の破片

I-3 職員厚生施設建設予定地の調査

- ▶ 遺跡名——K 39
- ▶ 所在地——北海道札幌市北区北 10 条西 6 丁目
(北海道大学札幌団地)
北緯 43 度 04 分 東経 141 度 20 分
- ▶ 調査主体——北海道大学
- ▶ 調査機関——北海道大学埋蔵文化財調査室
- ▶ 調査期間——1987 年(昭和 62 年) 7 月 6 日～1987 年
(昭和 62 年) 8 月 10 日(予備調査 7 月
6 日～11 日, 本調査 7 月 20 日～8 月
10 日)
- ▶ 調査面積——914 m²

《調査の経過および所見》

I 予備調査

当地区の予備調査は、宿泊施設の中庭 130 m²と前庭の一部約 100 m²について作業員 8 名で実施した。現存の宿泊施設の部分については、これらの予備調査の状況をふまえて建物取り壊し(8 月下旬)の後に対応することにした。

予備調査では、1 m 四方の試掘溝を 1 m 間隔に設定し、中庭の部分で 24 個、前庭の部分で 16 個、計 40 個掘削し、それぞれの試掘溝の名称は南西の隅から東側へ順に番号を付して示した。〈第 4 図〉

予備調査の結果、遺物が出土したのは試掘溝 6、7、12、16、22、23 の 6 箇所からで(図中黒ぬりの部分)、遺物は土師器の破片と黒曜石の剥片である。出土層位は、厚さ 30～70 cm の積み土の下位にある黒色土中からであるが、試掘溝 6、7、12 は攪乱層である。遺構は、試掘溝 22 で竪穴住居跡とみられる黒色土の落ち込みが 1 箇所検出された。

この段階で、当地区は擦文時代(西暦 9 世紀?)に営まれた集落跡に何らかの関わりのある遺跡であることが判明したので、本調査を実施するために必要な『遺跡発掘届』を関係機関に提出する手続きをおこなった。

なお、前庭での予備調査の部分は遺構、遺物がまったく発見されなかったため、そこの未調査部分と現存の建物部分の調査は、建物を取り壊した後に実施

することにし、本調査では試掘溝 22 を中心に発見された竪穴住居跡 1 軒を対象とした。

2 本調査

発掘にあたり、この部分の周辺に堆積している厚さ 70～80 cm の積み土を除去し、遺構のプランを確認しようとした。ところが、この遺構の中や周囲にはすでに新旧 12 本の水道管、下水管、マンホール、ガス管などが埋設されていた。このように、昭和初期から継続的に行われたこの種の埋設工事等によって、遺構はとくに東側の一部分をのぞいて大部分が破壊されており、その全貌を把握することができない状態であった。しかし、とぎれとぎれに残存していた壁の上面をつなぎ合わせて復元された竪穴住居は、隅丸方形のプランで、一辺が約 3 m 強の比較的小型なもの、と推定された。

竪穴の発掘には、攪乱の部分さけて土層堆積状況を記録するためのベルトを 1 本設定した。覆土中から出土する遺物の取り上げは、住居のプランを四等分し、層単位で収納することにした。

竪穴の発掘の結果、覆土はつぎのような堆積を示していた。

まず、竪穴のもっとも上部には黒色土壌(厚さ約 10 cm)が堆積していた。これは、竪穴の外部に広く分布している土層(第 III 層)で、竪穴のくぼみに落ち込んでいたものである。遺物は出土していない。

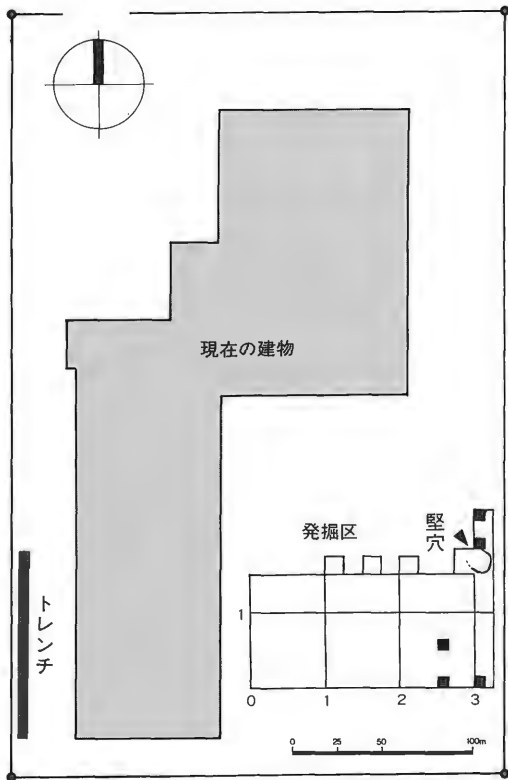
黒色土壌を取り除くと竪穴のくぼみ全体に焼土や炭化物(覆土 1 層、5～10 cm)の分布がみられた。焼土や炭化物は、竪穴の中央部では床面にのっており、壁際では粘土混りの褐色土壌(覆土 2 層)の上に堆積していた。遺物は出土していない。

壁際にそった部分に堆積していた褐色土壌(覆土 2 層)からは、土師器の破片が 6 点と黒曜石の剥片が 1 点出土した。

以上のような土層堆積は、この竪穴住居が廃棄されて後、壁際にそって竪穴が埋まりつつあった頃に火災を受けたことを示しており、竪穴住居が廃棄された直接の原因が火災にあるとはいえない。

完掘された竪穴住居跡は、一辺の長さが 3.5 m で

第4図 職員厚生施設建設予定地の調査

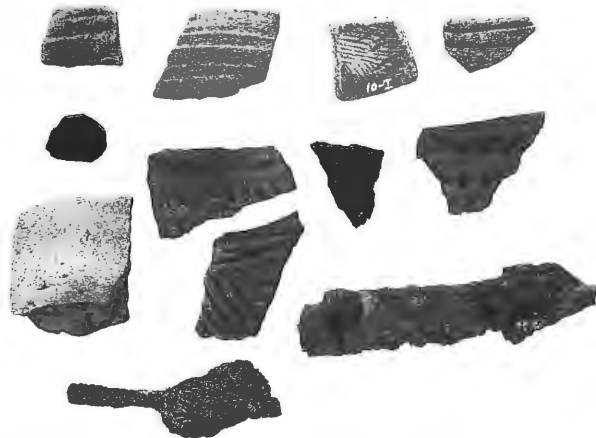


調査区の図

調査区は手前の林

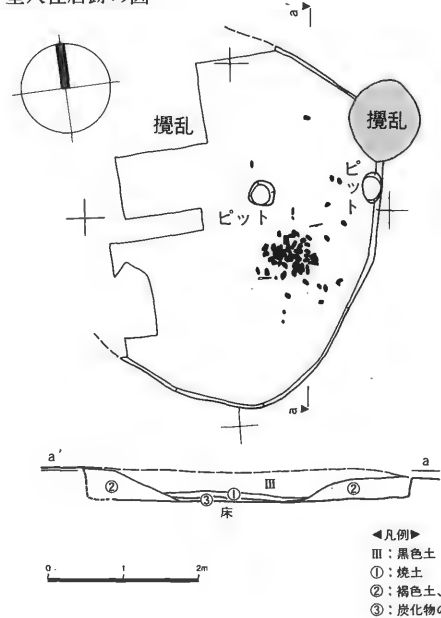


出土遺物



発見された堅穴住居跡

堅穴住居跡の図



隅丸方形を示すものと推定されるが、北側から西側にかけて約 $\frac{1}{2}$ の部分が先に述べた後世の土木工事などによって破壊されており不明である。竪穴の残されていた部分をみると、まず、床面は黄色粘土層(第IV層)を掘り込んで平坦に整地し作られてるが、柔らかい。壁はほとんど垂直に立ち上がり、床面までは30~40 cmの深さである。しかし、柱穴やカマドの付設遺構はみられなかった。多分、柱は直接住居の床に据え置かれたであろうし、カマドは後世に破壊された部分つまり、西側か北側の壁際に造り付けられていたものと推定される。〈第4図〉

この竪穴住居に伴う遺物は、2点の金属製品(1つは紡錘車、もう1つは刀子と推定される)とにぎりこぶし大の礫(総数68個)で、いずれも床面に貼り付いて発見された。これらの遺物は住居の東側に近い部分に集中しており、この集石のまわりにも16個の同じような礫が点在していた。その他、住居の覆土中や床面からは、炭化材を検出・収納した。また、床面直上の炭化物を含む土壌は浮游選別用に採取された。

このように、今回の調査は1軒の竪穴住居の残存していた部分について実施し、写真撮影や実測図を作成し終了した。

3 建物取り壊し後の調査

調査対象面積は600 m²、1987年9月10日に調査を実施した。

当地区は、1987年7月6日~8月10日まで発掘調査を実施し、擦文時代の竪穴住居跡が1軒発見されていた所である。その際、建物の部分はそれを取り壊した後で調査を実施する、といういきさつがあった。先日(9月9日)、建物の取り壊しが終了したのを受けて埋蔵文化財の調査を実施した。

調査は、重機(バック・ホー1台とショベルカー1台)を使用して積み土を除去、自然堆積の土壌の上面で遺構などの有無を確かめた。この地区は平均60~80 cmの積み土が堆積されていたが、その下の地盤は黄色の砂質粘土である。この土層の上面を丁寧に精査したが竪穴住居などの遺構は全く発見されなかった。

とくに、建物本体の真下に相当する部分には白黄色の砂の堆積がみられ(東西約20 m)、ここが旧河川跡であったことを示していた。したがって、この部分に竪穴住居など遺構が分布していなかったこともうなづけるわけである。

よって、写真撮影などを行った後、埋め戻し、当地区におけるすべての調査を終了した。

(横山英介)

◀引用文献▶

吉崎昌一・岡田淳子編 1983 『北大構内の遺跡2』北海道大学

第II章 昭和63年度の事業報告

II-1 調査および保存事業の報告

(1) 昭和63年度に予備調査を行った地区は、以下に記す4箇所である。

1 工学部先端電磁流体実験施設建設予定地

▶調査期間／8月9日

▶面積／22 m²

調査方法：工事予定地のもっとも南端部に幅1 m、長さ22 mの試掘溝を設定(第5図)、古代の遺構・遺物の有無を確かめた。なお、この地域は最近行われた積み土などが堆積していると予想されたので、重機を1台使用してそれを除去、自然堆積土層の上面を探ることとした。

調査結果と所見：まず、調査区のほぼ中央部分から東側にかけては、地下約3 mの深さまで下水管が埋設されており、その工事によって自然堆積土層はすでに攪乱されたものと推定された。調査区のほぼ中央部分から西側にかけては、0.7～1.2 mの厚さで積み土がみられた。積み土の下位には黒色粘土層が堆積していた。この土層は河川など水の作用によって堆積したものとみられる。いわゆる「ドブ土」である。約2 mの深さまで掘り下げたが、遺構・遺物は発見されなかった。

以上のように、今回試掘溝を設定した場所は河川(サクシュコトニ川)中に相当したため、古代の居住地などには不適當であった。しかし、実験施設の本体はこれより北側、つまり河川敷ないしは川岸に位置するため調査の必要があるものと判断される。

調査は既存の建造物を取り壊す際に立会を行いその所見にもとづき計画・実施するのが最良かと思われる。

2 医学部70周年記念碑設立予定地

▶調査期間／9月5日

▶面積／5 m²

調査方法：工事予定地の中央で東西に幅1 m、長さ5 mの試掘溝を設定(第5図)、古代の遺構や遺物の有無を確かめた。調査は作業員2名で実施した。結果と所見：まず、調査区のほぼ中央から西側にかけての地区は、地下約30 cmの深さにコンクリート基礎

があり、それを含めて深さ約80 cmまで積み土が見られた。また、調査区の東側は、地下約80 cmの深さまで積み土が見られ、自然堆積の黄色砂質土はその下に現れた。しかし、古代の遺構や遺物は全く見られなかった。

3 農学部附属農場馬鈴薯置場新設予定地

▶調査期間／9月27日

▶面積／51 m²

調査方法：工事予定地の中央で東西に幅1 m、長さ51 mの試掘溝を設定(第5図)、古代の遺構や遺物の有無を確かめた。調査には重機1台を使用した。

結果と所見：まず、調査区のほぼ中央から北側にかけての地区は、地下約30～40 cmの深さまで積み土、以下黒色土(10～15 cm)、黄色粘土が堆積していた。また、調査区の南側は、地下約40～60 cmの深さまで積み土が見られ、以下黒色土(10 cm)、暗褐色土(10 cm)、灰色粘土が堆積していた。しかし、古代の遺構や遺物は全く見られなかった。

4 薬学部環境整備工事予定地

▶調査期間／10月17日・18日

▶面積／41.9 m²

調査方法：工事予定地全面に重機1台を使用し積み土の除去を行い、古代の遺構や遺物の有無を確かめた。

結果と所見：まず、調査区のほぼ全面に厚さ約30～40 cmで積み土、深さ60 cmの部分に東西に走る幅40 cmのコンクリート製の埋設物が見られた。その下は黄色の砂質粘土が堆積しており遺物包含層に相当する黒色土は見られなかった。このように、古代の遺構や遺物は全く見られず、工事には支障がないものと判断された。

(2) 昭和 63 年度に工事中立会を行った地区は、以下に記す 14 箇所である。

- ①工学部校舎建設現場
————— 4 月 19 日～6 月 2 日
- ②共同溝工事現場(医学部精神科病棟北)
————— 5 月 10 日～31 日
- ③農学部パワーセンター工事現場
————— 5 月 10 日～31 日
- ④工学部正面玄関前記念植樹現場
————— 5 月 12 日
- ⑤大型計算機センター前ガス管理設現場
————— 5 月 12 日～6 月 2 日
- ⑥工学部正面玄関前記念植樹現場
————— 6 月 6 日
- ⑦共同溝工事現場(クラーク会館西側～南側)
————— 6 月 11 日
- ⑧北 11 条線中央道路横断ガス管理設現場
————— 8 月 9 日

- ⑨工学部正面玄関前記念植樹現場
————— 8 月 13 日
- ⑩公務員宿舍受水槽・ホンプ室建設現場
————— 9 月 19 日
- ⑪公務員宿舍排水溝掘削現場
————— 10 月 25 日・27 日
- ⑫低温科学研究所前電気ケーブル埋設工事
————— 10 月 31 日～11 月 4 日
- ⑬工学部データ通信回線改修工事現場
————— 11 月 11 日～12 日
- ⑭学生部，農学部附属農場その他困障改修工事現場
————— 11 月 25 日～28 日

以上の工事現場は、舗装材や置土あるいは旧建物の基礎工事などですでに破壊が著しい。また、地層の保存状態が比較的良好でも古代の遺構、遺物などは発見されなかった。

II-2 本調査

昭和 63 年度は、1-(1)で述べたように予備調査を実施した 4 箇所とも古代の遺跡ではなかったので、本調査を実施する必要がなかった。(横山英介)

第5図 昭和63年度の予備調査の写真



工学部先端電磁流体実験施設建設予定地

医学部70周年記念碑建立予定地



農学部附属農場馬鈴薯置場新設予定地



■付篇-1 北大構内遺跡の土器群変遷と推定される年代観

1980年にはじまった北大構内の遺跡調査によれば、その性格や時期などが推定できるものが17個所にのぼる。また、これも含め一般的・予備調査などでおおよそ30地点で古代の遺物などが採集されている。〈第1図〉

調査の結果、構内でもっとも古い時期の遺跡は、統縄文期後葉に営まれた学生部体育館予定地(第6図1~4, 吉崎・岡田編 1988: pp. 24~47)で西暦3世紀末から4世紀代のものである。この年代観の根拠は、本州で出土するこの種の土器が弥生時代終末期の弥生土器などに伴出すること(横山ほか 1983: pp. 16~17, 小林 1988: pp. 212~232など)によっている。他に、医学部附属大学病院中庭(吉崎・岡田編 1983: p. 19)やサクシュコトニ川遺跡第3文化層(北海道大学埋蔵文化財調査室編 1986: p. 197)などの資料が相当する。

ついで、ポプラ並木東地区遺跡(第6図5~10, 吉崎・岡田編 1987: pp. 15~102)が西暦5世紀代に営まれた墓地跡ということになる。年代観の根拠は、この遺跡から出土した土器群のなかに本州東北部の古墳時代中期に見られるものと特徴を同じくする土師器杯(同図5)が伴出したことによっている。これと同じような伴出例は、秋田県でも確認されている(小松 1987: pp. 6~8)。

しかし、構内で主体を占めるのは擦文時代の遺跡で、しかもその前期に営まれたものである。擦文時代前期初頭に与えられる年代は西暦7世紀後半から8世紀前半だが(横山 1987: pp. 33~38), 構内の遺跡でそこまでさかのぼるものは、いまのところ知られていない。構内の遺跡で擦文時代のもっとも古いものは、サークル会館予定地(第6図11~15・17~23・25, 吉崎・岡田編 1981: pp. 11~79)や薬学部受水槽予定地(第6図16・24, 吉崎・岡田編 1985: pp. 16~23)などのように前期後葉で、西暦9世紀前半の年代が与えられるものである。他に、言語文学部予定地(吉崎・岡田編 1988: pp. 11~12)や職員厚生予定地(吉崎編 1989: pp. 5~9)などの資料が相当する。

中期のものにはサクシュコトニ川遺跡第2文化層(第6図26~53, 北海道大学埋蔵文化財調査室編 1986: pp. 98~124)などで西暦9世紀中葉から後葉にかけて、それより新しいものにサクシュコトニ川遺跡第1文化層(第6図54~57, 北海道大学埋蔵文化財調査室編 1986: pp. 95~97)や工学部核磁気共鳴装置予定地(吉崎・岡田編 1988: pp. 19~23)などが相当し、西暦10世紀代と推定される。(横山英介)

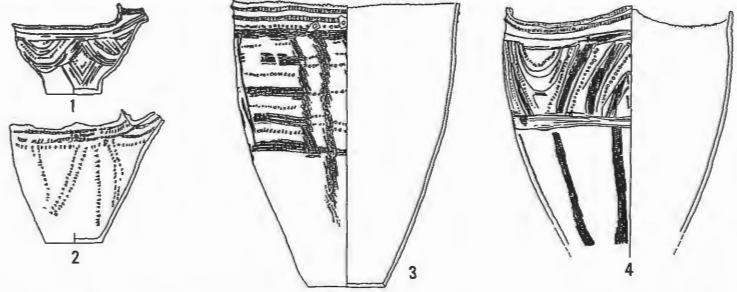
◀引用文献(五十音順)▶

- 小林克 1988 「統縄文文化期の遺構と遺物」『寒川I遺跡・寒川II遺跡』 秋田県埋蔵文化財センター pp. 212~232
小松正夫 1987 『宮崎遺跡発掘調査報告書』 西目町教育委員会
北海道大学埋蔵文化財調査室編 1986 『サクシュコトニ川 北海道大学構内で発掘された西暦9世紀代の原初的農耕集落 [本文編] 1』 北海道大学
横山英介 1988 「擦文時代の開始年代修正について」『考古学ジャーナル』 No. 292 pp. 33~38
横山勝栄ほか 1983 『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書内越遺跡』 新潟県教育委員会
吉崎昌一・岡田淳子編 1981 『北大構内の遺跡1』 北海道大学
吉崎昌一・岡田淳子編 1983 『北大構内の遺跡2』 北海道大学
吉崎昌一・岡田淳子編 1985 『北大構内の遺跡4』 北海道大学
吉崎昌一・岡田淳子編 1987 『北大構内の遺跡5』 北海道大学
吉崎昌一・岡田淳子編 1988 『北大構内の遺跡6』 北海道大学
吉崎昌一編 1989 『北大構内の遺跡7』 北海道大学

第6図 北大構内出土土器の変遷

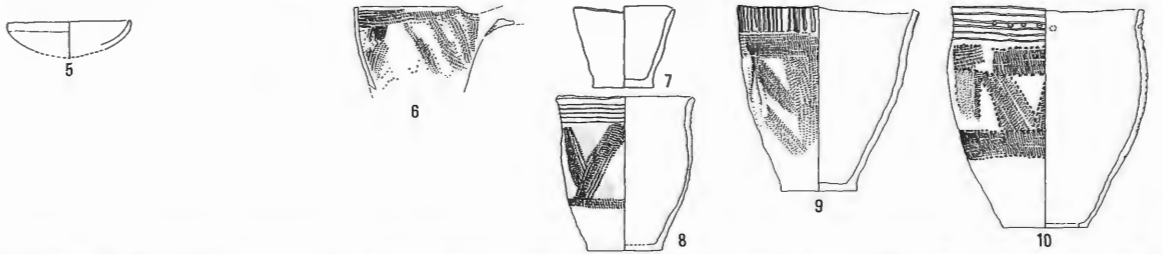
0 10 20 40 cm

続縄文期
後C₂・D式



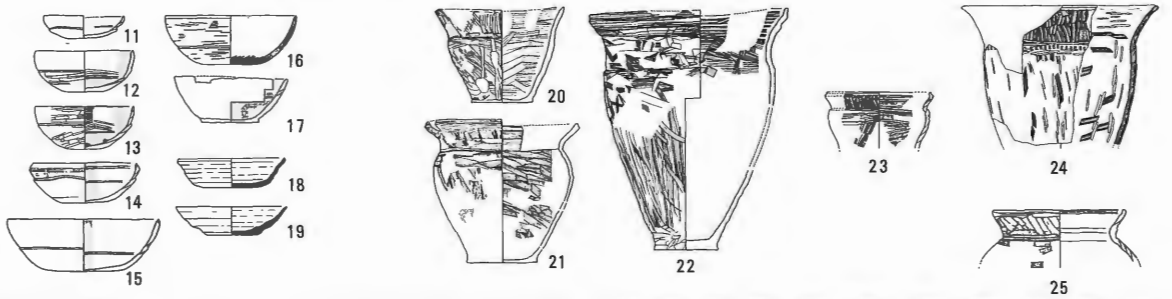
体育館

続縄文期
北大I式



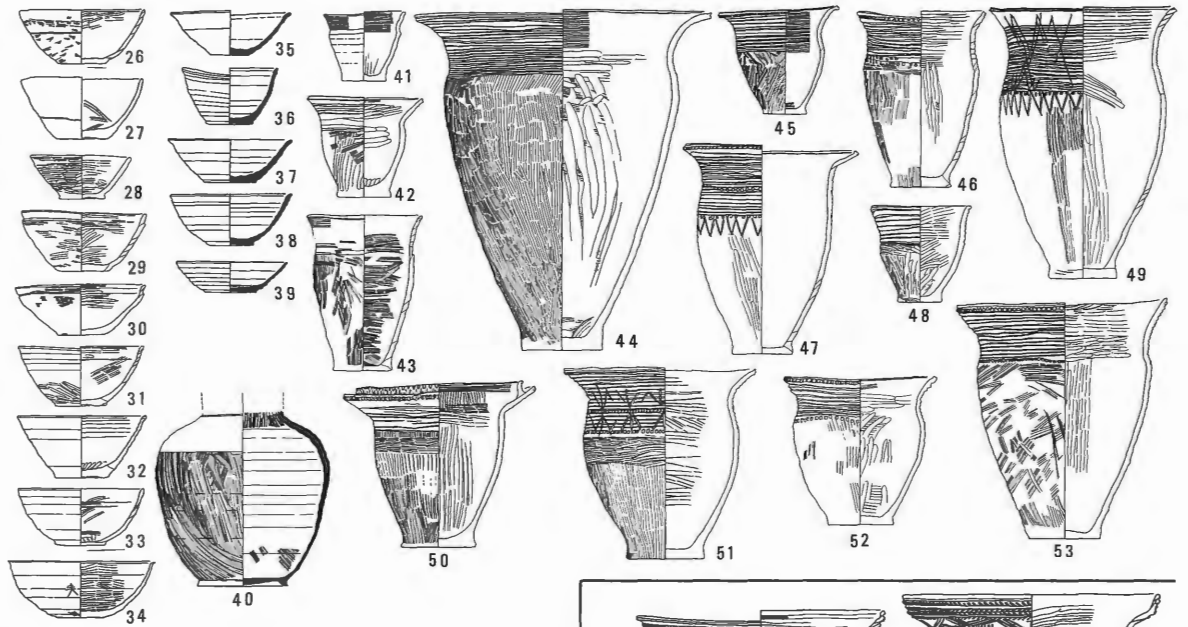
ポプラ並木東

擦文時代
前期



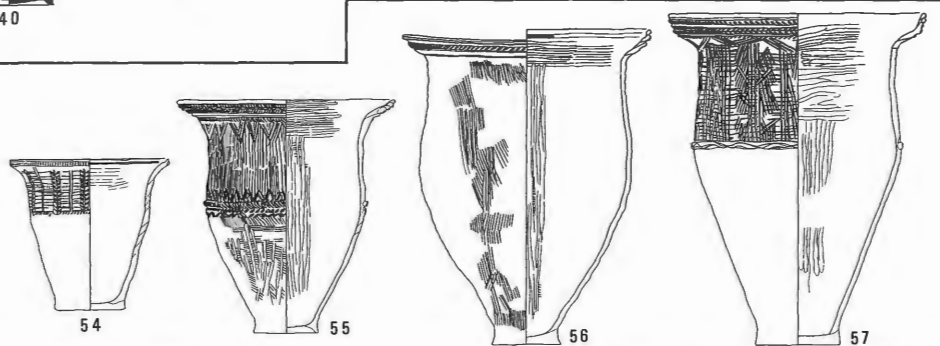
サークル会館

擦文時代
中期



サクシュコトニ川
第2文化層

擦文時代
中期



サクシュコトニ川
第1文化層

1 穂軸の検出

サクシュコトニ川遺跡は、札幌市北海道大学構内で1981年～1982年に発掘調査が実施された西暦9世紀の擦文時代の集落である。この遺跡からはオオムギ、コムギ、アワ、キビ、などを中心とする炭化植物遺存体が出土している。これらの炭化種子組成から、擦文時代にはかなりの規模での雑穀栽培が実施されていたものと推定されていた(吉崎 1986:198-201)。

すでにCrawford氏も報告の中でふれているが、サクシュコトニ川遺跡において最も優勢な植物栽培には、オオムギ次いでコムギがある。氏は、このオオムギの穎果を6条オオムギ(*hexastichous*)と同定している(Crawford 1986:143-160)。この報告にはまだ詳しくは記載されていなかったものに、ムギの穂軸があげられる。この種の遺物が他地方の報告書類の中で取り扱われている例がないかどうか調べてみたが、みつからなかった。おそらくこの種の植物遺存体は、これまであまり注目されたケースがなかったように思われる。しかし、今後の農耕問題を考える上には、こうした遺物の検討が重要な手掛かりだと考えられるので、注意して作業を進めていた。その後の整理作業で、期待通りこうしたイネ科の穂軸が多数出土していることが確認され、その一部を報告することができた(椿坂 1988:55-64)。ひき続き実施した本年度の作業では、これら出土資料と現生の穂軸との比較検討から、これがオオムギとコムギの穂軸に分類することが可能ではないかと考えられるに至った。以下、写真図版に従って説明する。また、写真図版の中では現生種のものについてはMを、出土資料についてはAのマークを付した。

第7図には現生およびサクシュコトニ川遺跡出土のオオムギの資料について、部分および拡大像を示した。1は現生オオムギの穂、2は穂の根元を拡大したもので下端の穂軸が見られる。オオムギの穂から小穂をすべて取り除くと4に示した様に連続接続している穂軸があらわれる。この穂軸を解体し、最小単位の一つを取り上げ、その上半部を走査電顕(SEM)で拡大したものが8であ

る。5、6は遺跡出土もので8と同部分と見られるもの。9はその周辺部をSEMで更に拡大したもので、現生標本8の側面に観察された毛の部分の痕跡と見られるもの。3a、3b、3cに示した資料は、SEM写真による5と同一資料の各面をマクロ撮影したものである(ニコンMULTIPHOTを使用)。10は5の表面組織、11は8の表面組織である。7は出土穂軸の裏面を示す。これらの比較観察から、穂軸の大きさから見れば遺跡出土のものは、現生の穂軸より小型の傾向が見られる。しかしその形状のその他からみて、出土炭化穂軸はオオムギと分類して間違いないだろう。

第8図には、現生およびサクシュコトニ川遺跡出土のコムギの資料について部分および拡大像を示した。サクシュコトニ川遺跡から出土しているコムギの穎果はきわめて小型の種類で、その大きさの測定値はコンパクトコムギ(*Triticum aestivum* ssp. *compactum*)の変異の範囲からずれ、形態的には小型種のインデアーフコムギ(*T.aestivum* ssp. *phaerococcum*)とやや似ている。

1は現生コムギの穂、2は穂の部分拡大したものである。コムギの穂から小穂を取り除くと、4に示したように連続接続している穂が表われる。3はその穂軸部分を拡大したもの。この穂軸を解体し、最小単位の一部をSEMで観察したものが5aである。5bはその表面組織。6aは遺跡出土の資料で炭化した穂軸の最小単位で、5aに示したものと同部分と見られるもの。6bはその表面組織である。7は遺跡から出土した多数の穂軸。ここにあげた出土穂軸は、その形状から見てコムギとして分類して間違いないだろう。しかし、大きさは現生の穂軸より小さい。これは前述したように、ここから検出されたコムギがきわめて小型の種類であることと関係するのであろう。

第9図には、穂軸と一緒に出土した他の部位の細片と見られるものの一部をSEMで観察した。その結果イネ科草本の一部と思われる組織細胞が観察された。1a～1bはアワ、ヒエ、キビいずれかの草本の一部ではないかと思われる。2a～2bはオオムギ、コムギの草本の一部

分と見られるが、未だ確証は得られていない。

2 提起される問題

サクシュコトニ川遺跡では、堅穴5軒と多数の焼土および多量の炭化物層を含む遺物廃棄スポットと考えられるものが検出されていた。この炭化物層からは、大量の栽培植物種子、オオムギ、コムギ、アワ、キビなどが発掘されている。第1表には、こうした栽培植物のなかからオオムギ、コムギの穎果、穂軸がまとまって出土した箇所を示した。これらの出土箇所から得られている資料

についてその出土量の分布を検討すると、必ずしも等質ではないことに気付く。今回検出された“穂軸”は、炭化物16から約1500個、炭化物19から6個、炭化マウンドから48個、したがって炭化物16からの出土量がもっとも多い。当初予想された炭化物マウンドからは、わずか48個しかみつかっていない。こうした出土量の偏りを生じさせる原因としては、土壌のサンプリング、フローテーション作業の不慣れから生じる資料の流失、あるいは脱穀作業などに関連する本来的な分布などが考えられる。未だ資料例数が不足しているのではっきりとは結論付けられないだろうが、筆者は最後のケースがもっとも可能性が高いと考えている。(椿坂恭代)

第1表 サクシュコトニ川遺跡におけるオオムギ・コムギの穎果および穂軸(オオムギ・コムギ)の出土表

出土箇所	層位	規模・形状	
炭化物 16	IV下～V	炭化物層が3.6m×2.5mの範囲で不整形に堆積する。 厚さ10mm×50mm	穂軸 オオムギ・コムギ
炭化物 19	IV下～V	炭化物層が長軸3.6m、短軸2.5mの不整形堆積し、少量の焼土、粘土粒を含む。厚さ10mm～40mm	穂軸 オオムギ・コムギ
炭化物 20・焼土 21	V	直径2mの範囲に炭化物層が上部に焼土層が下部にある。 炭化物層の厚さ50mm～60mm	オオムギ コムギ
焼土 25	IV	焼土層は約1mで不整形。 厚さ2mm～4mm	オオムギ・コムギ
焼土 42	IV	長軸7mで不整楕円形。上部は炭化物を含む暗褐色の粘土で、下部多量の炭化物と焼土粒を含む厚さ10cmの腐植土。	オオムギ
焼土 46	IV	不明	オオムギ・コムギ
炭化物 52	IV	長軸約7mで不整形。炭化物の薄い層が何枚にも重層して堆積している。	オオムギ コムギ
焼土 71	IV	焼土層大1.5m、小0.5mで不整形。 厚さ20mm～40mm	オオムギ
炭化物マウンド (17-11) (18-11)		長軸南北に約14m、短軸0.4m～0.6mの不整楕円形。 堆積はc-dライン(17-11グリッド↔18-11グリッドの北東を通る地層) 炭化物の堆積は、18-11グリッド付近が15cm～18cmともっとも厚く17-11グリッド付近で5cm～6cmと薄くなる。もっとも堆積が厚い部分では炭化物層が4～5枚重層している。	穂軸 オオムギ・コムギ
炭化物マウンド (17-10) (17-12) (18-10)			オオムギ・コムギ

◀引用文献▶

- 椿坂恭代 1988 「北大構内遺跡出土の植物遺存体関連資料」 吉崎昌一・岡田淳子編 『北大構内の遺跡6』 北海道大学 pp.55～64
- 吉崎昌一 1986 「まとめにかえて」 北海道大学埋蔵文化財調査室編 『サクシュコトニ川遺跡 北海道大学構内で発掘された西暦9世紀代の原初的農耕集落 [本文編] 1』 北海道大学 pp.198～201
- Gary W.CRAWFORD 1986 「植物種子遺存体」 北海道大学埋蔵文化財調査室編 『サクシュコトニ川遺跡 北海道大学構内で発掘された9世紀代の原初的農耕集落 [本文編] 1』 北海道大学 pp.143～160

第7図 現生オオムギと出土資料の比較



現生オオムギの穂



現生オオムギの小穂



出土穂軸の表面



出土穂軸の側面

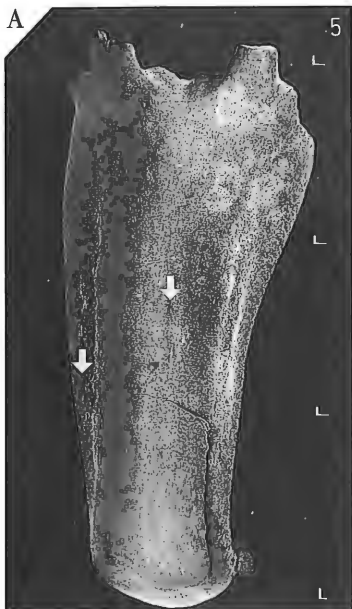


出土穂軸の裏面



出土穂軸 ×35

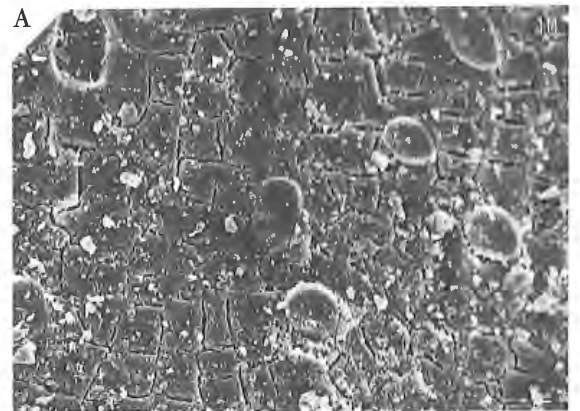
現生オオムギの小穂を取り除いたもの 側面



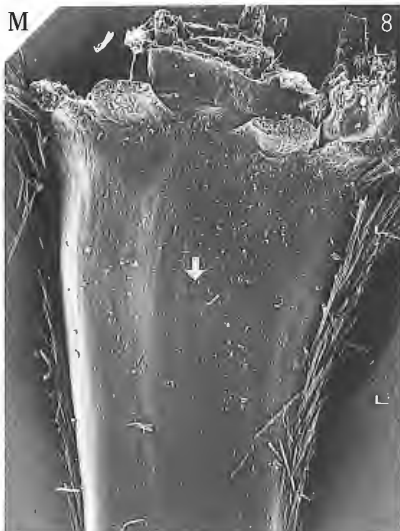
出土穂軸 ×35



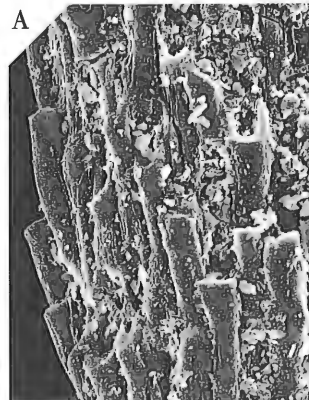
出土穂軸 ×35



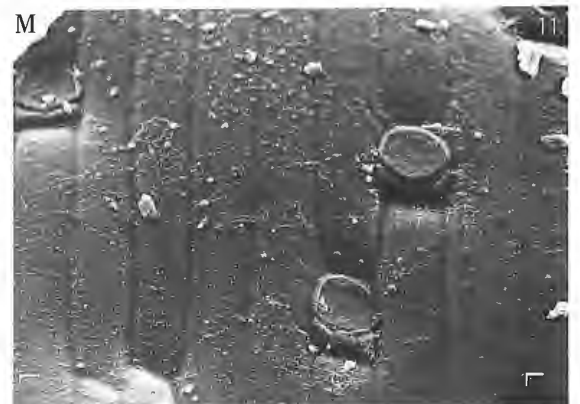
5の拡大部分 ×1000



現生穂軸 ×35



5の拡大部分 ×1000



8の拡大部分 ×1000

※スケール「—」の間隔×35~×500は1mm, ×1000は0.1mm, ×2000~×3500 0.01mm

第8図 現生コムギと出土資料の比較



現生コムギの穂



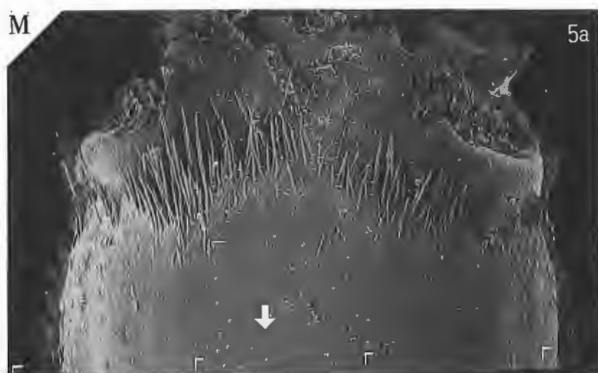
現生コムギの小穂



現生コムギの穂軸



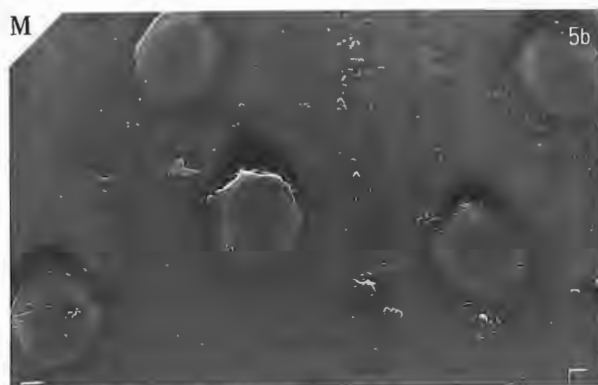
現生コムギの小穂を取り除いたもの 側面



現生コムギの穂軸 ×35



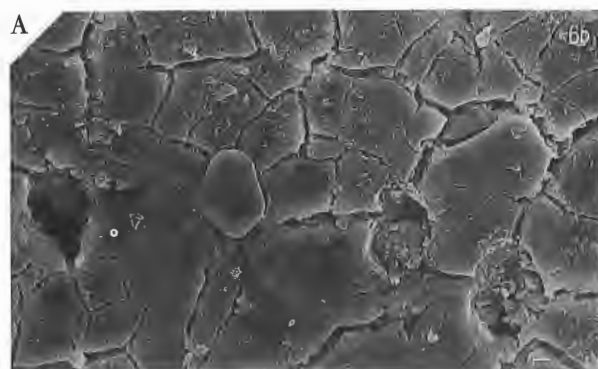
出土穂軸 ×35



5 aの拡大部分 ×1000

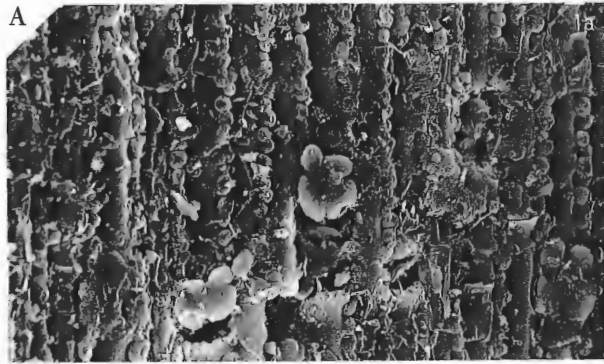


出土穂軸

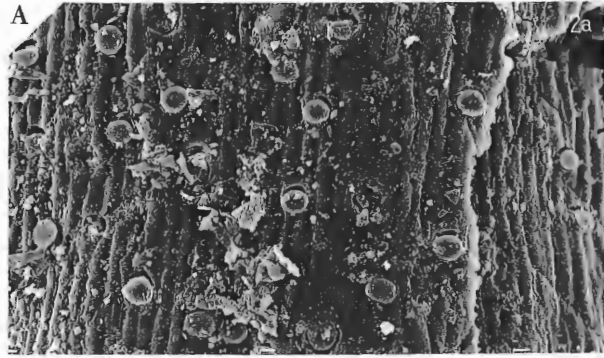


6 aの拡大部分 ×1000

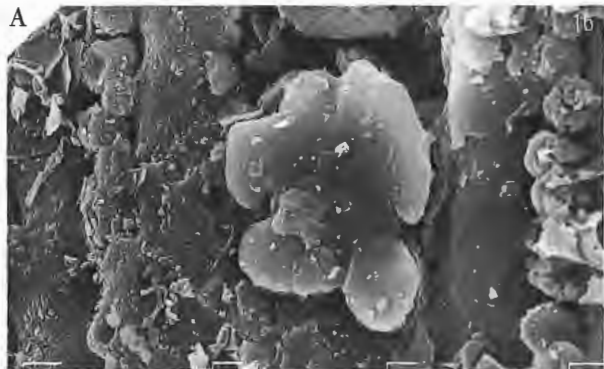
第9図 出土イネ科植物片およびムギの小穂略図



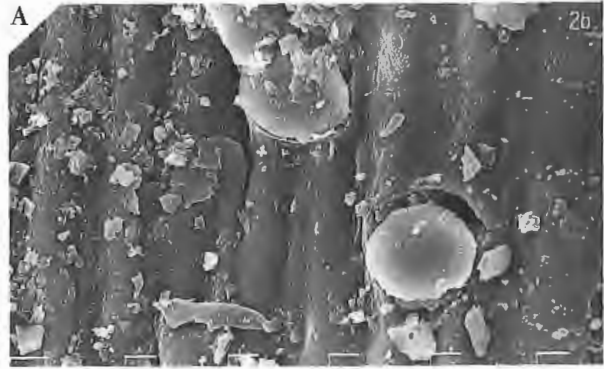
出土植物細片 ×1000



出土植物細片 ×500



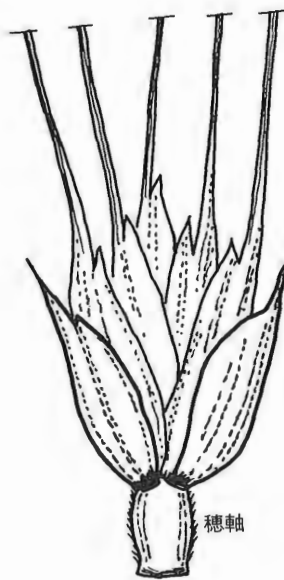
1 aの拡大部分 ×3500



2 aの拡大部分 ×2000



6条オオムギの小穂

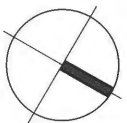
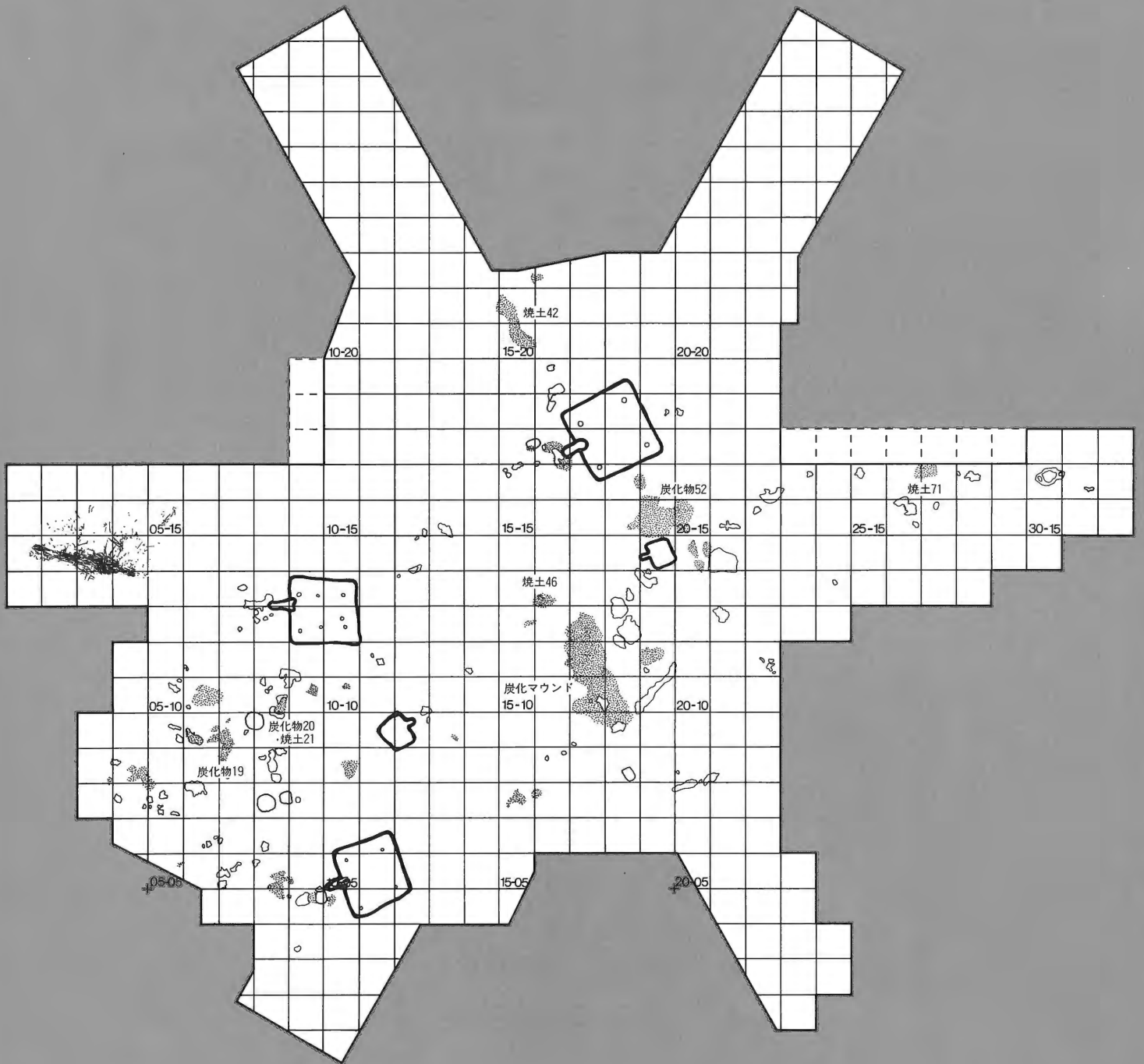


コムギの小穂



イネ科草本の一部

第10図 サクシュコトニ川遺跡、遺構配置図



あとがき

北海道大学構内で実施されている埋蔵文化財調査の報告「第7号」をお届けする。今号からは表紙デザインを変えてみた。6号までの表紙は、赤外写真のネガを利用したもので、捨て難い味があると自賛していたが、建物の配置を含めて土地利用の形態がだいぶん変わったので、思い切って新しくしてみた。

今号では通例になっている事業報告のほか、簡単な付編を2編加えておいた。北大構内で発掘されている遺跡や遺物についての概要、とくにその年代観などにたいする問い合わせがかなりある。それで横山君にデータの整理と全体の概観をしてもらった。これが第一である。

次いで植物遺存体の資料紹介である。サクシュコトニ川遺跡の調査以来、炭化植物種子を中心とする植物遺物に関する研究展開が急速に進んでいる。第6号にもその一部が報告されているが、今回はとくにオオムギとコムギの穂軸についての資料を椿坂君に報告してもらった。ムギの穂軸についての報告は、おそらくこれが本邦最初の資料であろう。遺跡の発掘がますます精密化する中で、このような新しい手法の採用は、古

代人の集落内での行動分析に重要な手掛かりを提供するに違いない。これまでのように栽培技術とか栽培植物の存在といった事だけでなく、栽培植物の集落内における処理のプロセス、つまり貯蔵や脱穀を始めとする各段階の復元について見通しのたてられる可能性が強まってきた様に思う。いいかえれば、遺跡の調査過程においてあまり丁寧に扱われてこなかった炭化物質片は、土器や石器同様に十分な注意を持って処理されねばならなくなってきたともいえるのではないだろうか。少なくともサクシュコトニ川遺跡をその代表例として、これまで我々が何らかの形で資料を検討する事ができた北海道西部の擦文時代遺跡においては、どれをとっても農耕生活が主体と考えざるをえない状況下にある。今後はこうした手法を駆使しての生活復元が推進されるだろう。調査展開が楽しみである。

1989年3月15日

大規模な農業を背景とする
九州吉野ヶ里遺跡の報道を聞きながら

吉崎 昌一



北大構内の遺跡

7

昭和62・63年度

平成元年3月20日発行

発行所 北海道大学
札幌市北区北8条西5丁目

編集者 吉崎昌一

印刷所 (株)北海道機関紙印刷所

●地図資料提供／北海道大学附属図書館北方資料室
●デザイン／桜井雅章

北大構内の遺跡

7



イ 博物館
 ロ 温室
 ハ 事務所
 ニ 自然分科園



本館 試室
 ニ 解剖室
 本圖書館
 ハ 事務所
 宿舎
 ト 學剣道場
 校舎